連載企画・にいがたの文字資料から　第８回（最終回）

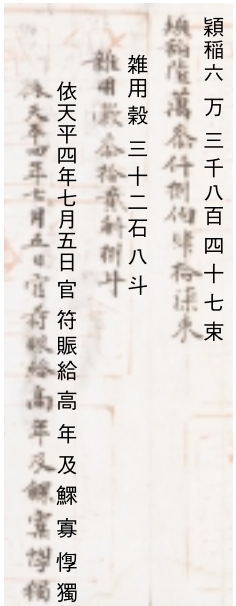
「地域の特色を見る」 ― 佐渡 ―

平成16年３月、佐渡は市町村合併により、古代の佐渡国のように一つになりました。佐渡は歴史の中において、養老六（722）年の穂積老（ほづみのおゆ）という人物が流されたことで、流刑地として有名になりました。しかし、すでに奈良を都とする律令国家が成立して約四半世紀が経ており、最初から流刑地としては考えられていなかったようです。

佐渡で出土した文字資料の著名な一つが旧真野町高野（こうや）遺跡出土の「軍」と「團」を記した墨書土器です（写真①）。別々の土器に記された「軍団」とは二～三郡を単位として各国内に置かれた古代の軍隊のことです。農民から集めた兵士で構成され、国司の管轄下にあったとされています。三郡があった古代の佐渡国には一つの軍団が置かれました。それが「雑太団（さわだだん）」といわれるものです。旧佐和田町に近い高野遺跡付近にあったと考えられています。各国の軍団は途中で廃止されますが、国防上の要地と考えた国々では残されました。雑太団は元慶三（879）年に指揮官の殺害事件が記録されており、その頃にも国を守る役割を果していたことが分かります。

写真①

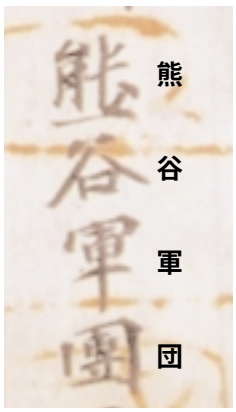
高野遺跡は佐渡国府とされる若宮遺跡にも近いのですが、この国府から中央政府へ送られた公文書が奈良東大寺正倉院に残っています。「天平四（732）年佐渡国正税帳（しょうぜいちょう）」といわれる約1300年前の文書です（写真②）。正税帳とは各国の年間の収支決算報告書で、税収入や支出用途などを中央政府に報告したものです。写真②では、国司しか持っていない国の印が一面に捺され、間違いなく佐渡国府で作成されたことが分かります。古代の公文書の漢数字は不正防止のため「一二三…十」ではなく、必ず「壱貳参…拾」という難しい字と定められ、それもきちんと守られています。しかも、その中では全国に発令された命令に従い、税の一部を使い高齢者や弱い農民への食糧配給も行われているのです。こうした中央との綿密な関係やそれを実施できる体制が早くに整ったのも、佐渡が古代の記録には「辺要国」と書かれているように、辺縁にあっても「要地」として重視されていたためと思われるのです。



写真②

近年、奈良の長屋王という皇族の大邸宅を囲う溝の中から雑太郡から送られた海藻（ワカメ）に付けられていた荷札木簡が発見されました。中央の皇族・貴族の食膳に必要な物資を送っていたようです。それ以上に、天皇が即位する最も重要な儀式（大嘗祭（だいじょうさい））でも佐渡の鰒（あわび）が重要な役割を果たしていました。当時でも鰒は大変な高級品ですが、ここでは隠岐や安房の鰒と一緒に、遠くから貢がせる新天皇の支配力を示す目的で使われています。佐渡の海産物は国家の威厳を広く示すために不可欠な要素となっており、このことからも佐渡の重要性が分かります。

軍団の墨書土器では私たちが通常用いる「団」ではなく、わざわざ難しい「團」を使っています。古代では必ず「團」と書き、今のところ例外はありません（写真③）。土器に文字を記した人は、日頃から難しい漢字に慣れ、「軍團」という文字を書く機会が多かった管轄機関の国府の役人か、軍団の関係者と思われます。この墨書土器が佐渡という地域が要衝として古代史の中で始ったことを象徴的に示す資料なのです。　（田中一穂）



写真③

※穎稲（えいとう）・・・刈り取ったままの穂先だけの稲　　穀（こく）（稲（とう））・・・脱穀したままの籾殻のついた米

（写真①）旧真野町高野遺跡出土　「軍」「團」墨書土器　カラー写真

（写真②）正倉院古文書　正集第二八巻　第十五紙　佐渡国正税帳
複製　国立歴史民俗博物館所蔵　　原品　宮内庁正倉院事務所所蔵。

（写真③）正倉院古文書　正集第三〇巻　第七紙　出雲国計会帳
複製　国立歴史民俗博物館所蔵　　原品　宮内庁正倉院事務所所蔵。